

黎明の坂 (一)

増田祐美

黎明の坂 (一) 目次

序	五
八重山吹	七
骨肉相食	八十二
信西入道	百三十五
平治合戦	百八十五
義平	二百九十五
天女降臨	三百七十

序

漆黒の空が仄かに青みを帯びはじめた。

振り返れば奥州平泉の北の入り口関山、その頂に建立された中尊寺から、朝の勤行を告げる後夜の鐘の音が山肌を伝って響いて来る。

「ゆきますか」

栗毛の馬に跨った若者に問われたもうひとりの若者は、

「おう、負けぬぞ」

言いがま、おのが跨る黒毛の腹を蹴った。栗毛も慌ててあとを追う。

靄が左右に流れ、露に濡れた若草が匂い立つ。

ふたりとも見事な御しぶりだ。

半刻足らず野を駆けまわったのち、ふたりは馬を前後に並べて小高い丘へ上がった。政庁が置かれる平泉館と関山の中間に位置し、周囲をぐるりと見渡せる物見に最適のここは、高榎、とよばれている。

ふたりは守兵に馬を預け、櫓に登った。

見上げる空の青は、すでにりんどうの花色ほどに薄くなり、東雲は洗朱から山吹色に変わりつつあった。その空の匂いを写して野の果ての北上川はゆるやかに流れ、対岸の束稲山は裾を川に沿わせたたおやかな山容を黒い影にして浮かび上がらせている。

「夜明けは見飽きるということがないのだな」

「九郎殿は毎朝のようにそう仰せですね」

「そうか。だが三郎も朝駆けすれば必ず、高榎へゆこう、と言うではないか。この景色が見たいのだから」

「それは……そうですね」

ははは、とふたりは声を合わせて笑った。

三郎は奥州藤原秀衡の三男忠衡、年齢は十五である。

今年十七になる九郎は、つい二年前まで牛若と名乗っていた義経、河内源氏嫡流源義朝を父に持つ。

そして母は天下第一の美女と謳われた常磐。その咲き零れる花のような女を義朝が見初めたのは、二十数年前の春の盛りであった。

八重山吹

一

篠青の狩衣かりぎぬに身を包み、その人は現れた。

立て烏帽子からかぶを着け、長覆輪ながふくりんの太刀を刷はいている。

そのうしろには胡籙やまくを背負い、節巻ふしまきの弓を持って控えたる郎党らうたうが数人。

「本日より当御所警固の指揮しんぱんを執る兵部少輔源義朝である」

太く、爽やかに、よく響く声である。

隨身所ずいじんじよの壁を背にして並んでいた舎人とねりたちがいっせいに威儀を正した。皆二十歳過ぎの、血気

溢れる若者だ。

今日から彼らの上官となる義朝は、武勇の誉れ高い八幡太郎義家の血を引く河内源氏の長男、憧れの人を間近に見る目は、どれも緊張と興奮に輝いている。

「選ばれし汝なんぢらの手並み、のちほどとくと見せてもらうぞ」

義朝は眼光鋭く若者たちを見まわしたのち、にこつ、と端正な顔を綻ほころばせた。誰もがその笑顔に引き込まれ、頬をゆるめずにはいられない。

近衛殿このととの あるいは近衛第だいにともよばれるこの屋敷は関白藤原忠通のもので、左京の一条三坊十町にある。本来は忠通の養女で当今とうぎん（今上帝）近衛帝の中宮皇子ただみちの御所なのだが、今は当今の御座所ござしよでもある。内裏は長らく修造されずにあつて荒廃しているため、当今は四条東洞院殿しじょうとうどういんを里内裏さとないりとしていたが、昨夏に火災に見舞われて焼亡、その秋からここで中宮と同宿しているのだ。

「やあ、来たか」

親しく声をかけたのは藏人仲經なかつね、義朝の正室由良ゆらの従兄だ。

「さ、早く。中宮はすでにお待ちだぞ」

「うむ。あ、いや少し待ってくれ。装束を調えたほうがよかるう?」

「おお、そうしたほうがよい。いろいろと連中はうるさいからな」

仲經はめくわせしてうなずいた。

義朝は隨身所ですばやく着替かきえを済ませた。緋色の袍ほろに無紋紫むもんむらさきの指貫さしぬき、冠かんを着け、手には扇あふ。ほう、見目よい男は何を着ても似合うな」

仲經の口ぶりに嫌味はない。いつもの清々しさに加え、優美な趣まじを纏まとった義従弟よしじゆいを感じして眺めている。

義朝は袖を広げておのが姿をしげしげと見た。

「まったく肩の凝る衣よ。これでも昔と比べて装いが楽になったというのだろうか? これを家から着つけて来ねばならぬ者は気の毒にくよな。そもそも院御所はすでに狩衣での出仕が許されておるというに、何ゆえ帝の御所は衣冠いかんでなければならぬのだ」

「まあそう文句を言うな。中宮に挨拶あいさつ申まをし上げる間の辛抱しんぱうだ」

仲經は笑いながら歩き出した。あとに義朝とその乳母子鎌田政清めのおとこかまたまさきよがつづく。三人は庭依ていいに奥へと進んだ。

あちらこちら、多くの下人たちが足早に動きまわっている。

「忙いそしそうだが、何かあるのか」

「今宵、中宮が管弦くわんげんの宴うたげを催もよほされることになっている。夜もすがらになるだろうな。それより御辺ごへん、兵部省の仕事もあるのに、ここの警固までやるのは大変ではないのか」

「何の、中宮を通して主上にお仕えすることになるのだ。大変など言うてはいられまい。それに、いざとなれば代官を務めてくれる頼もしい者がおる」

義朝は乳母子を振り返つて笑つた。
うららかな春の光が庭一面に当たり、きれいに敷き詰められた白砂が照り渡っている。池の手前に植えられた、雪を置いたかと思紛うばかりの今まさに満開の桜に、義朝と政清は思わず足を止めた。

「見事であるう？ 何でも、わざわざ吉野から運ばせたのだそうだ」
身も庭へ出るたばに見惚れるわ、と仲經も頬をゆるめたが、すぐに真顔に戻し、「では御辺らはこちらで」と、義朝たちを庭に残して南階を上がつていった。

義朝は階近くに、政清は少し下がって蹲踞した。
貴人との会話は、身分が違えば同じ室内にあってても人を介してなされることが多い。まして義朝は今日が初の参内、まだ殿上に昇ることも許されてはいなかった。

やがて、廂の間の入り口に座した仲經が何か言うのが聞こえた。見れば、いつの間にやら女官がひとり、奥に控えている。遠目で、しかも明るい庭からではその顔はよく見えないが、着ている衣の色や佇まいからして年若いということとはわかる。

仲經が義朝の到着を告げたのであろう、女官は立つて背を向けた。
(どのようなお言葉がいただけるのか)

無論、階の下にいる義朝に中宮から直接声がかかるなどあり得ない。奥の間の、さらに御簾の内にいる貴なる女の言は、女官の口を以て仲經に伝えられ、それがおのれに伝えられることになる筈だ。

ややあって、女官がこちらへ引き返して来るのを認めて、義朝は目を伏せた。高位ではないにしても、宮の傍ら近くに仕える女を露骨に見るのは失礼だと思つた。

女官の座る気配がする。と、

「兵部少輔殿に、中宮のお言葉を申し上げます」

何と、女官が直に話し出したではないか。義朝は驚き、平伏した。

「——兵部少輔源朝臣義朝に近衛殿警固を申しつける」

その声の何とまろく、何と明るいこと……。

義朝はうつとりとなつた。玉を転がすような、とはこうした声をいうのであろう、発する音ひとつひとつが光沢ある膜で覆われているようでありながら柔らかく、芳気さえ感じられる。

「本日よりの勤め、しかと果たされんことを望む。汝が武勇はさまざま聞き及んでおるゆえ、まことに心強く思う——」

女官の声が耳に弾む。しかも階上から、ほんのりと甘い香が漂ってくる。

「——昇殿を許す」

いつの間にか、義朝は顔を上げてしまつていた。薄花桜色の衣に身を包んだ、気品ある匂うばかりの美貌がそこにあつた。中宮のお言葉が語られている間は平伏していなければならぬことなど、すっかり忘れていた。お言葉の内容もうわの空だ。

じつと目を離さない義朝を黒々とした瞳で見返していた女官は、わずかに首を傾げたかと思つて、次の瞬間、どうしたことかにつこりとした。あまりに見詰められて戸惑い、無意識に微笑んでしまったのであろう。だが、ああ、この愛らしさは——義朝は呼吸を忘れた。

「以上でございます」

女官は急に澄ました顔に戻つた。我に返つた義朝は、慌てて額が白砂に着くばかりに頭を下げた。

「こたびは御所警固を任命いただきましたこと、まことにありがたく存じます。我が一門の名誉に懸けて、任務を遂行いたす所存に、でございます」

覚えず声が震え、ますます身を低くした。

女官が下がったようだ。

「まぶた 瞼の裏に佳人の笑顔がよみがえる。

(天は、何と麗しきものをこの世に在らしめたものか……)

「ゆくぞ」

突然、真横で仲經の声がして、義朝は飛び上がった。彼はいつの間に階を下りたのであろう、急いで廂の間を見たが、もう女官の姿はなかった。

「さつそく冥にお誘いいただけるとは、気に入られたものだな」

先ほど来た道を逆に辿りながら仲經が我がことのように嬉しそうに言うのに、何のことで、と義朝はぼうつとしたまま聞き返した。

「まさか、聞き漏らしたのではあるまいな」

仲經は目をまるくして、大げさに驚いて見せる。

「今宵の管弦の宴に、中宮が昇殿をお許しになったではないか」

「あ、ああ、そうであったな」

義朝は曖昧に返事をし、へへつ、と笑った。

「中宮の御主催で主上のお出ましはないとはいえ、昇殿を許されるのは大変なことなのだぞ……ではのちほど。忘れるなよ」

隨身所まで戻って仲經が離れてゆくや、乳母子政清が詰め寄った。

「殿。斯様な大事をお聞きになっていられぬとは、如何なることにございますか！ 殿らしゅうもな」

「いや、済まぬ。少し考えごとをしておった」

「何ですと？」

「まあ、そう怒るな。こういう時のためにこそ、そなたには常にそばにいてもらっておるのではないか。ははは」

「笑いごとではありませんせぬぞ、まったく。王家に近づくにあらゆる機を逃してはならぬ、と仰せになったは殿ですぞ。御所警固は手段に過ぎぬことを忘れるな、と」

「そうであった。済まぬ」

義朝は真顔で謝って、だが、と首を傾げた。

「今日が初日ぞ。なぜ中宮は宴にお誘いくださったのであろう？ しかも直々にはあらぬが、仲經殿を介さずお言葉をくだされた」

政清はゆっくりと肩を聳やかした。

「れいげんいんちち 靈験灼然ですな」

「何だと」

「王家に近づくにあらゆる機を逃してはならぬ——そのためには、あらゆる手を打っておかねばなりません。今日のこの日に先立って、然るべき方々にそれなりのものを纏ませてあります」

くわっ、と義朝は顔を擧めた。

「もう効いたというのか」

「でしような」

「さすがは政清」

「いえ、当たり前のことをしたまで」

政清はいたって涼しい表情だ。義朝は嬉しくなった。

(よい乳母子が支えてくれるというに、我がふらついてどうする)

たかがひとりの女官ではないか、と義朝はおのれに言い聞かせた。

「よし、仕事だ。まずは舎人の長をよべ。有事の時、前任者は如何なる戦術でゆく手筈であった

のか確かめてやろう」

さっそく、舎人たちにはさまざまな課題が与えられた。矢倉やぶらの立て方から伝令の送り方まで、その甘いところに義朝は容赦なく怒号を飛ばしたが、上手くやれば思いきり褒めてやった。

これがゆるい訓練に慣れきっていた若者たちには新鮮でよかったらしい。しかも頑張れば極上の笑顔を向けてもらえる。

(こ奴ら、これほど出来がよかったか?)

と、舎人の長も驚くほどに若者たちは呑み込みよく機敏に対応して、上官を大いに満足させた。

訓練は初日ということもあって早くに終わったが、

——信頼と憧憬を得た上官は、部下を存分に活かし使える。

そんなわかりきったことを、舎人の長は勿論、舎人たち自身も再認識する半日となった。

◆◆以下、各章より抜粋◆◆

「骨肉相食」より

月が中天を少し過ぎた。

すでに義平隊はじめ各部隊は影を捨て移動し、大蔵館へ三、四十間のところに迫っていた。

煌煌と照る月の光を受けて、土塁を積み上げた台地に佇む屋敷が、葺戸ふきどのひとつひとつまでもがはっきりと見えるほどに、その姿を浮かび上がらせている。

月見の宴は果てたようだ。先ほどまで義平たちところへ押し寄せていた、人々が歌い笑うさなざめきはもう聞こえない。

館の明かりが徐徐に消え、物見櫓ものみやぐらの松明が小さく揺れるばかりになった頃、南側に待機していた横山党が喚声を上げて攻めかかった。

——真昼の如く斯様に明るい夜に、誰が攻め入ろう。

大蔵館の守兵の誰もがそう思っていた。さらに、相模国の義平の館でも毎年、中秋には月見の宴が催されることを誰彼となく知っていたことが油断に繋がった。娯楽としてそうない時代である。義平も今宵は攻めては来ぬ——この夜、館にいる男たちはひとり残らず酒を口にし、歌に踊りに酔いしれ、余韻を楽しみながら館全体が眠りにつこうとしていた。

そこへ敵兵が降って湧き、館内は混乱した。

守兵は慌てて矢倉やぶらを立てようとしたが、酒のせいで踏ん張りが効かず、的は定まらない。対して義平方の前衛は戎装じゆうそうしているうえ、十二束つがの矢を引く弓の名手揃いである。次々に射抜かれた守兵は地に叩きつけられて折り重なり、その喚き叫ぶ声は広大な館を貫いた。

「敵は何奴だ」

南の庭先に飛び出して来た重隆が怒鳴った。

「鎌倉の源太義平殿か」

「いえ」

片膝突いて答える郎党の顔は引き曇っている。
「それが横山殿の旗印にて……」

「何、横山が」

横山党はぎりぎりになって動いた。いや、ぎりぎりまで動かなかった。

源氏や秩父氏と同じように、武蔵各地の武士団はそれぞれ勢力拡大を狙っている。横山党は秩父重隆の背後にいる児玉党を見ていた。主に武蔵国南部から相模国北部にかけて勢を拡げる横山党に対して、児玉党は武蔵国北部から上野国南部にかけて勢を扶植し、横山党に引けを取らぬほどに成長してきている。

横山党にとつて、今回の義賢・重隆と義平・重能の対立は、児玉党を牽制するのに絶好の機会、直前まで動かなかったのは、敵方を油断させる以外の何ものでもなかった。

(しまった)

重隆は地団駄を踏んだが、遅かった。横山党が単独でことを起こす筈がない。つまり、すでに義平・三浦・猪俣も動いているということではないか。

「信西入道」より

信頼のぶより如きが近衛大将とは、と驚き、ぴしゃりと遮った信西に、後白河院はしつこく食い下がった。
「信頼は近衛中将も検非違使別当もよう勤めたではないか。次こそは大将の地位を与えてやってもよいのではないか」

「近衛大将という職は、三公(太政大臣・左大臣・右大臣)を務める者でもめつたになれるものではないませぬ。執柄しつへい(撰政・関白)の御息にとつても究極の官職にございます。何より信頼殿の家柄では大将にはなれぬこと、院にはよくおわかりの筈」

ゆっくり噛んで含めるように話す信西に、後白河院は面倒臭そうな視線を向けた。

「過去には重代清華せいかの家にあらずとも、場合によっては大将に任じられた者もあるというではないか。拘らずともよい。近衛大将の役、武に長けた信頼に最適であろう」

「そのような役に信頼殿をお就けになれば、奢り高ぶって謀逆の臣にもなりかねませぬぞ。まさか信頼殿が望まれたものではありませんまいな」

「それはない。あれは汝に劣らぬ忠実な男よ。それによろしく。そうそう、先頃もこのようなことがあったわ……」

信西は暢気にしゃべる主の顔を、空しい思いで見詰めた。

今まで信頼の能力を高く評価して、その昇任を認めてきた。おのれ自身、官位は四位ながら、子供たちを大國受領や弁官に任じている。しかし大将や大臣となると話は別だ。この職に就ける家柄は明確に定められており、例外はまず認められない。信頼の近衛大将昇任を許せば、許したこの信西が朝廷内の多くを敵にまわすことになる。さらに敵意は、信頼の昇任を要求した後白河院にも向けられるのだ。その敵意を纏めるのは、言わずもがな、強い武力を背後に持つ者になる。それが当の信頼でないとなれば誰が断言出来るよう。

(院にはあの男の怖さがわかりではない)

近衛大将になりたや、などと間違っても口にしない男だからこそ、危ないのだ。

任じなされたは院、許したは信西。そして、叡慮に叛けず、心ならずも大将を拜任せざるを得なかつた我こそは最大の被害者である——あの賢い男はそう訴えて、人事の慣習を破られたくないという些事に憤る男たちの不満をうまくおのが追い風に变えるであろう。そう、信頼ほどの者が、朝廷の新しき主導者になれる機会をみすみす逃すとは考えられない。

そういえば信頼はこしばらく出仕していなかつた。

気鬱のため、環境を変えての静養が必要とかで、伏見にある源中納言師仲の別荘へいったきりだ。伝え聞くところでは、信頼は気晴らしと称して、毎日欠かさずことなく馬を駆り弓を引いているらしい。

(まこと、気鬱か)

時折、東国訛のあるだみ声も聞こえるという。もしや武芸を磨いているのではないか。奴は一体、何を企んでいる——。

「……それにしても汝、なぜ信頼の昇任をそう洩るのだ。おおそうか、わかつたぞ、妬いておるのである。この頃めつきり、夜に汝をよぶことがなくなつたからな」

「いや、それは……」

「まあ、そう悪く思うな。汝ももう五十四。年は年なりの味があるが、やはり若い肌には勝てぬというものだ。あはははは」

(このうつけが！)

思わず怒鳴りそうになつた信西は、うつむいて、がりつ、と奥歯を噛み締めた。

もとより政治力も教養もないのは承知している。だが自身の身の危険にまで鈍感でいられては堪らない。乳母夫としてのこの身まで危うくなるではないか。

いや待て、後白河院がこの信西を亡き者にしようと考えているのかもしれない。理由は何でもよい。とにかく信西が信頼を否定したという既成事実を作って、信頼にこの身の排斥をけしかけるのだ。あるいはすでに信頼も同意のうえのことか。しかし院と結んでこの身のみを討つというのなら、そう難しい話ではない。今、人払いしたこの御座所でひと突きすれば済むことだ。なのになぜ信頼は、伏見に出向いてまで武芸に汗を流しているのか。なぜ東国の、恐らく義朝の麾下であるう武士もいるのだ——。

何かとつてもないことが起きる、と信西は直感した。それが何かはまだわからないが、その中心におのれがいるであろうことだけは、なぜかはつきりとしていた。どうすればよい？ 今から何が出来る……。

「平治合戦」より

「残念ながら今や六波羅が御所である。まったく見事にやられたものよ。すでに六波羅には関白はじめ、左右大臣以下公卿公家、京武者まで数多馳せ参っているという。朝敵になりたくなくば六波羅へ参れ、と触れを出したらしい」

「父上はどうなさるおつもりですか」

義平が問うた。

「無論、打つて出る。だが御辺らには無理強いせぬ。源氏の習いは二心なきとするが、朝敵と見なされた以上は固執することはない。国に帰るも平氏につくも、そなたらの好きにするがよい」棟梁と仰ぐ義朝の思わぬ言葉に、将たちは耳を疑った。

「何を仰せられます」

「矢尽き、太刀折れるまで共に戦いますぞ」

「もとより六条河原に屍を晒す覚悟！」

居並ぶ将が一斉に口を開き、どよめいた。

彼らは義朝の麾下に入った経緯はどうあれ、源氏の嫡流の名に恥じぬ義朝の、東国に勢を拡げてゆく武勇に敬意を払った。また、熱田大宮藤原季範や常磐など、王家に繋がる的確かつ強力な人脈を作り、上洛後八年で父爲義の官職を越えるという政治手腕に感嘆した。その義朝が、保元の乱以降に蒙っている不遇は、東国の将にとって我がことのように辛く感ぜられていたのだ。

「さすがは我が見込んだ武將だ。しかし無理はするな」

義朝は満足そうに微笑み、将ひとりひとりの顔をじっくり見まわした。

と、その時それまで黙っていた鎌田政家が、底鳴りする声で言った。

「殿も御無理なさいませぬよう。我らは、殿の新しき国創りの夢に懸けているのでございます！」続いて政家に負けぬ、響きある声がよくみな響いた。

「まさしく。殿の夢は我らの夢にございます。我らとていつまでも都のへなへな公家らの走狗として、無駄に戦わされるのは御免蒙りたい。平氏は武門の家柄とはいえ清盛殿以下いくさを知らず、まことの武士とは言えませぬ。墮落した朝廷に依らぬ武士の世は、弓矢取る身の辛さを知る殿でなければお聞きになれませぬ。殿のお命、何としてもお護り申し上げます」

声の主は、普段は無口で口下手な熊谷次郎直實であった。

「ほう、直實があつばれな物言いよ。その心ばえあらば、たとえ義朝なくともいずれ我らが目指す世となろうぞ」

義朝は呵々と笑った。

——殿は目先の勝敗のみに拘つておいではない。

政家が新しき国、と言ひ、直實が殿の夢は我らの夢、と言ったことは、平氏に一矢報いることのみ熱くかけかけていた将たちを心底奮い立たせた。

我らは朝敵とされた。

——朝廷に叛く賊。

結構ではないか。では言わせていただこう。

我らの主は国であつて、朝廷ではない。我らが義朝と共に目指しているのは、今の朝廷——民衆の生活の実態を知らぬ君主や、既得権益に固執する撰閑家以下の官人貴族が政を執る朝廷——に依らぬ世を創ることだ。我らが今の朝廷の敵ならば、この国のゆく末を考えぬ今の朝廷を構成する輩は、我が国の敵ではないか。

もう一度言う。我らの主は国である。我らが戦う相手は文字どおりの国賊である。武士として「君主」に対してではなく、「我が国」に対してなすべきことをなすための戦いに挑もうとしているのだ——。

「義平」より

夕餉を終えた義平に、常磐は塗籠^{ぬりかご}でゆっくり眠るよう勧めた。

「それでは義母上が……」

「わたくしは子供たちの部屋で休みます。義平殿はここ何日もあまりお休みになっていないのですから、さ、早く横におなりなさいませ」

「申し訳ない」

押し込められるように塗籠へ入った義平は、常磐が妻戸を閉めるや否や、崩れるように眠りについた。

二刻は眠ったろうか――。

目が覚めた義平は、青墓で父と別れて以来感じていた疲れが、すっかり消えているのを感じた。

常磐の顔を見、湯浴みをして腹も満たし、安心して熟睡したからに違いない、と思いつき手足を伸ばしてあくびをした時、義平は明かり窓から薄く光が射して込んでいるのに気がついた。

隣の部屋の燈のようである。

(消し忘れか)

明かり窓の位置が高くて覗くことが出来ない。が、どうも気になる。塗籠を出て部屋へとまわってみれば、妻戸が少し開いている。内を窺^{うかが}うと、部屋の隅で女性が衝立障子^{ぶつたちょうし}に寄りかかっているのが見えた。

影容^{かげよう}からすると常磐のようであるが、衣が先ほどとは違う。

(菖蒲殿^{あやぶ}だろうか……)

その女性はどうやら眠っているらしかった。起こすのも憚られて一度背を向けたが、常磐かもしれぬ、という期待が足を部屋へ踏み入れさせた。

そつと近づいてみると、それはやはり美しい女^{むすめ}であった。衣を替えたのは湯浴みをしたからであろう、豊かな黒髪はまだ少し湿り気を帯びているらしい。

前に置かれた文机には、書が開かれたままになっていた。静かに膝を折って覗き込んでみると、
(君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る)

の歌が見える。

(古今集か……)

梅の花も恥らう常磐。その常磐の本当のすばらしさを解することにかけるとは、父に負けていないつもりだ。

だが、なぜ常磐は眠らずにここにいるのか。

(まさかずっとここにおいでだったのでは……)

いやそうだ。追っ手を煙にまいたと言われても、やはり心配だったのであろう。屈強の郎党も交代で見張りに立っている。それでも、熟睡する私の近くでこうして見守ってくれていた。異変があればいち早く我に知らせるべく、この寒い部屋ですつとこうしていてくれたのだ――。

そうとしか考えられなかった。

常磐たちがこの館へ移ってから、女手は侍女菖蒲^{あやぶ}しかいない。乳飲み子も抱えて、どれほど疲れているだろう。少しでも時間があれば眠りたい筈なのだ。今、少女のように無心に目を閉じているその姿に、義平は胸の底から突き上げてくるものを感じ、目の奥が熱くなった。

義平は常磐のそばへにじり寄った。

仄かな甘い香が義平を包む。この屋へ裏から忍んだ先刻、いきなり現れた義平に驚いた常磐を抱え起こした時に嗅いだ、あのかぐわしい匂いだ。

「常磐殿、お風邪を召されませぬ」

着ていた衣を一枚脱いで常磐に着せかけると、思いがけず常磐は衝立障子を離れ、義平に寄りかかって来た。

「殿……」

常磐の細い声が聞こえた。

(この二十日あまり、どんなに辛い思いをされたことか)

いけないと思いつつ、義平はそっと常磐の肩を両の腕に抱いた。見るからに華奢な常磐であるが、こうして抱き締めてみると、まるで春の陽に溶ける淡雪のように繊細な女であった。

常磐にはこれからどのような運命が待ち受けているのか、義平にはわからない。謀反人となつたおのれに、この女を助けることなど本当に出来ようか――。

(父上、なぜ常磐殿を残して逝かれたのだ)

義平の頬を涙が静かに伝った。

「天女降臨」より

長成は一旦目を閉じ、息を整えて笛を構えた。

静やかに流れはじめた音の、凪いだ水面を撫でて渡る微風そよかぜのような清らかな響きに、春の宵のかぐわしい夜気が揺らぐ。

知らず知らず、常磐は身を乗り出して聴き入っていた。

(何と優しいお方……)

演奏は人格が鳴る。奏している時の感情は偽ることが出来ても、隠そうとして隠せぬのがその人の性格や生きざまである。

常磐は、長成という人を聴いていた。と、ある時点から、長成が素直に歌いかけてくるのを感じた。

戸惑いながらも、常磐はその歌に寄り添ってみた。

清廉な龍笛りゅうてつの音に身を委ねる。聴く、のではない。

耳に入るの是一本の旋律のみ。だがその単旋律を支える音たちの何と表情豊かなことか。

それらは、萌葱もみぎ、白緑びやくきょく、薄草はくそうと木々の若葉が見せる緑の濃淡のなかに、山桜や山躑躅しんじゆくがこれまで紅色の濃淡をぼかし染める春山の美しさに似ていた。その音色が、義朝、義平の死以来、常磐が心に固く纏ってきた鎧を一片ずつ絡め取る。剥ぎ取られた鎧は柔らかな薄衣となつて舞い上がり、天上の闇へと消えてゆく――。

長成の歌はまだつづいている。拍子を変え、調子を転じ、およそ人間の持つありとあらゆる感情が鮮やかに再現されてゆく。長成の歌は常磐の心を驚掴みにし、愛撫し、突き放して抱き締めた。

義朝が、義平が、朝長が、爲義が浮かんだ。六条堀河館、船岡邸、一條庵で過ごした七年間、頭を駆け巡った。どつぷりと源氏の家の思い出に浸る常磐を、長成の歌はなおも追いかけて、柔ら

かに包み込んだ。

(この方にはすべてを投げ出せるかもしれぬ)

常磐は思った。見るともなく目にしていた、生絹の帷子に描かれた菖蒲が、じわり、と滲むのを心地よく感じながら――。

長成は笛を膝のうえに戻した。ひと呼吸、ふた呼吸置いても、几帳の向こうからは何の声も聞こえない。

(お気に召さなんだか)

だが常磐ほどの教養があれば、お世辞でも奏者にひと言ある筈である。

奏している間、気づけば脳裏に常磐の面影が浮かんでいた。それを追って、気持ちの昂るに任せて吹きつづけた。

(嫌気されたかもしれぬ)

長成は常磐の箏を聴いたことがないが、聴いた者は皆一樣に、別世界へ連れていってくれるようだ、と顔をとろけさせて誉めちぎっていたのを覚えている。それほど演奏が出来る者なら、音のうしろにある奏者の本心を見抜くのは容易いことだ。

沈黙に耐え兼ねて長成が声を発しようとした時、影がすつと立ち上がった。影は少し奥へ進み、柱の裾を引きまわしてこちらに振り向き、腰を下ろした。

影の upper body がわずかに手前に傾いた。と、鳴り出したのは箏であった。

(おお……)

紡ぎ出された音は、そのひとつひとつが水晶のような透明感を持っていた。それらが黄金、白銀、紅、紫紺と、常磐の心の動きにつれてさまざまな色彩を帯び、空に漂う。音の珠は連なり重なり、あるいは散って、静寂を彩る。変幻自在に操られる箏の音に、長成は酔い痴れた。

(……いや、逆かもしれぬ)

聴き進むうちに、静寂を――音の珠があることによって浮かび上がる、しつとりと懐かしい静寂を聴かされているようにも感じられて来た。それほどまでに、この空間のすべてが一体となっているのだ、と長成は震えた。

常磐に長成の歌が聞こえたように、長成には常磐の語りが聞こえた。

悲しみ苦しみ、不安、そして戸惑い。若々しく勝気さが覗いて見える演奏の下に、今あるがままの常磐が横たわっていた。まるで聞き手の度量を試すかのように、常磐は生々しくおのれをさらけ出したのだ。

胸を締めつけられ、長成は袷元を掴んだ。

(はじめて会った我に……)

演奏が華やかであるからこそ、おのれを隠そうとしない素直さが切ないほど可憐であった。

(常磐殿は我に身を預けようとしているのではないか)

すでに長成に迷いはなかった。というより、実は常磐が一音を爪弾いた瞬間に、おのが魂がおのが意志を離れて常磐を優しく抱き止めたことを、彼は知っていた。

ふいにこみ上げて来た熱いものが、頬を伝い落ちた。

(もしも、まことに常磐殿が我を恃みとされるのなら)

そうであるならば、常磐を託す男として、天の意志が清盛をしてこの長成を選び給うたに違いない――。